□3月23日説教（隅野徹牧師）短縮版「自分を捨て、自分の十字架を背負う」（マタイ16:13～28）

20節までのところで、イエスがただの人間ではなく神の子、救い主だと告白できたペトロでしたが、主イエスがご自身を、死の苦しみをも受けるメシアだとお話しになると、受け入れることが出来ませんでした。救い主とは、強く繁栄をもたらすリーダーでなければならないという自己中心な思いが、ペトロにはありました。その思いを見抜かれたからこそ、主イエスは「サタン、引き下がれ！」と強い言葉を発せられたのです。

私たちの心の中にも「救い主はこうあってほしい」という自分勝手な思いはないでしょうか？救い主はわたしの願いを常にかなえてくれる存在だと思っているならば、望みと違うものが与えられた時に「約束が違う」と神に抗議してしまいます。栄光のメシアを望んだのに苦難のメシアが示されて、それを受け入れられなかったペトロの心は、私たち一人ひとりにあります。だからこそイエスはわたしたち一人ひとりにも「わたしについてきたいのなら、自分を捨て、十字架を背負って」ついてきなさい、といわれるのです。

イエスの十字架は漠然と見るものではなく、イエス・キリストが自分のために命を捨てて下さったことを覚えながら仰ぐものです。その思いで十字架を見つめるなら、私たちは自己中心な思いを捨てることができると信じます。

神が負うように示された十字架は、一人ひとり違っています。他者の痛みを自分の痛みとして担うことだったり、自分の体や心の痛みを自暴自棄にならず、そっと引き受けることもそうでしょう。肉体面でも他者との関わりの面でも、負わねばならない痛みがありますから、思い通りにならず不満を感じることが起こります。それでも私たちを救い永遠の命を与えるために、自ら痛みを負い、十字架にかかってくださった救い主イエス・キリストが私たちと共にいて下さることを、折に触れて思い出したいものです。主とともに十字架を背負う道を歩んでまいりましょう。（終）